

特集：本シェルジュ6.0——ビジネスのさまざまな悩みにお応えします

## プロローグ 本シェルジュカフェ，オープン！



村上 知也  
神奈川県中小企業診断協会

土砂降りだった。季節外れの雷が鳴り響き、数メートル先の視界も怪しい。

まるで、いま自分が置かれている状況と同じだな。

上山渡は、差しても役に立たない傘の中で考える。住宅メーカーに入社して5年。営業を担当し、数々の顧客を訪問したが、いっこうに成果が上がらない。

さっきもずぶ濡れで会社に戻ったら、上司の冷たい目と声が待っていた。

「おい、上山。2年目の高井が注文をとってきたぞ！ やっぱり、こういった大雨の日はいいなあ」

「そうですね、先輩！ お客様を訪問したら、『こんな雨の日まで来てもらって、申し訳ない』って、契約がトントン拍子に進んじゃいました」

「上山も当然、うまくいったんだろうな？」

いたたまれなくなって、トイレに行くと言ったまま、渡は会社を飛び出していた。

絶対に俺のほうがたくさんお客様を訪問しているはずなのに…。俺のほうが熱心に説明しているはずなのに…。俺のほうが知識はあるはずなのに…。うまくいかない。先が見えない。風もいっそう強くなる。もう、傘なんて差しても差さなくても同じだな。いてもいなくても同じの俺と一緒だ。

雨とともに、考えまでもどんどん暗く、冷たくなる。ふと顔を上げると、目の前にカフェの看板が見える。こんな所にカフェなんてあ

ったかな、と思いながら扉に手をかける。傘を乱暴にたたみ、店に転がり込んだ。

「いらっしゃいませ」

低く、それでいて温かい声が扉の中で響いた。ハンカチで雨を拭き、コートを脱ぎながら注文を考える。

ホットコーヒー…は今日2杯飲んだから、レモンスカッシュ…は雨に打たれたばかりだから寒いかな…じゃあ、ホットココア…は甘すぎるな。

背後からバリトンの効いた声で話しかけられた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

ああ、もう来たか。まだ悩んでいるのに。本当に俺は優柔不断で、嫌になる。たまに選べば裏目に出るし、いまの会社を選んだのは失敗だったかなあ。いや、いまはそれより注文を決めなければ。もういいや、温かいものを何でも適当に持ってきてもらおう。

「温かいものでございますね。承知いたしました」

その声の主は、室内にしてはやかにしっかりとした扉の向こうに消えた。

変な店に入っちゃったなあ。いや、そもそも俺は何をやっているんだ。俺の問題というより、あの腹立たしい課長のせいで何もかもがうまくいかない。こんなに俺が頑張っているのに、俺のことなんか全然見てくれない。それに、あの後輩の高井だ。俺の言うことは全然聞かないくせに、課長に媚びばかり売り

やがって、俺の悪口ばかり言っているに違いない。おかげで、良い案件は全部、高井のほうに行ってしまう。俺だって、あんな優良案件ならすぐに受注できたはずなのに、雨なんか関係あるかって。客も嫌なやつばかりだよ。俺から買う気もないのに、資料だけたくさん持ってこいと言って…。おかげで、毎日残業ばかりなのに、まったく売れない。

「またもや、暗い考えが頭の中を巡る。」

「このままでいいのか。どうしたらいいのか。」「お待たせしました」

気づかないうちに店員が戻ってきたようだ。振り返ると、ロマンスグレーをオールバックにし、同じ色の口髭を生やした店員が立っていた。不思議な威厳がある。店員というよりもマスターだ。黒い長めのジャケットに、白いワイシャツと黒いネクタイ。そして、髪の毛と同じ色のスラックスを履いている。右手には白いナプキンがかけられ、左手に木製の飾りのついたお盆を持っている。

変わったユニフォームだな。そうだ、執事の服装と一緒だ。それに、何かがおかしい。お盆の上に湯気も立っていないし、カップもポットも置いていない。無駄に荘厳なお盆の上には、1冊の本が置いてあるだけだ。

「本シェルジュカフェへようこそ。ご注文をお持ちしました」

あっけにとられる渡の前に、しっかりとした手つきで静かに本を置いた。そう、まるで執事のように。

「あのう、温かい飲み物を適当にと頼んだつもりなんですけど…」

「はい、あなた様に適切に当てはまる“温かい本”をお持ちしました」

まるでかみ合わない。何でずぶ濡れで本なんか読まなきゃいけないんだ、と言おうとして、すっかり体が乾いているのに気づく。

「ここはカフェじゃないの？」

「はい、カフェでございます」

「じゃあ、本じゃなくて、お茶を出してよ」

「いいえ、“本シェルジュカフェ”ですから、お出しできるのは本だけでございます」

そっと本に触ってみる。温かくもない。

「温かい本って言ったけど、この本、冷たいじゃない」

「いいえ、読むと温まるのです」

じっと執事、いやマスターを見つめる。渡は、ほとんど本を読まない。でも、目の前にある1冊が、温かな光をたたえているように見えて、無性に読みたくなった。手に取って、表紙を見る。その瞬間、渡は自分の周囲がオレンジ色の光に包まれたかのように感じ、夢中になってページをめくり出した。

はたして、本シェルジュの執事のようなマスターは、何の本を持ってきたのでしょうか。この物語は、エピローグへと続きます。

次項からの各章では、さまざまな悩みを持った登場人物が、本シェルジュカフェを訪問します。ご自身の悩みに合った章から読んでいただくのも良いかと思います。

第1章 考えが整理できない若手へ

——図解なんて嫌いだ！

第2章 リーダーシップに悩む新人課長へ

——年上部下と上手に付き合うために

第3章 初めてのプレゼンに悩む営業へ

——プレゼンって何だ？

第4章 未知の商品に戸惑う新任プロジェクトリーダーへ

——ロボットと自分の可能性を信じて

第5章 40歳で退職を余儀なくされたビジネスパーソンへ

——ピンチは、やりたいことに気づくチャンス

村上 知也

(むらかみ ともや)

Webマーケティングに強い独立5年目の診断士。年間100冊以上の本を読むことを義務にしている。

